



| | |
|------------------------|---|
| Title | 日中の少子高齢化と福祉レジーム：育児と高齢者扶養・介護 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 郭, 莉莉 |
| Citation | 北海道大学. 博士(文学) 甲第12080号 |
| Issue Date | 2016-03-24 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/61699 |
| Rights(URL) | http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Guo_Lili_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 郭 莉 莉

学位論文題名

日中の少子高齢化と福祉レジーム—育児と高齢者扶養・介護—

本論文は、近年の福祉の多様な供給者や福祉の多元化に着目する福祉ミックス論のなかで最も参照されることの多いエスピン・アンデルセンの「福祉レジーム論」を基本的な視座とし、官製的/自生的地域組織による「共助」と近年のNGO/NPOや社会的企業による福祉サービスの二つを加えた東アジア特有の福祉レジームを理論化し、福祉政策の課題を発見することを目指すものである。そのために、中国と日本の福祉レジームを比較しながら子育て支援と高齢者扶養の二つの福祉領域において福祉制度がどのように構築され機能しているのかを把握するべく、中国と日本における福祉制度を既存研究によってレビューし、福祉施設への参与観察によって実態を把握し、施設運営者・利用者に対する面接調査を通して比較地域福祉論を構築しようとした。

第Ⅰ部では、日中をはじめとする東アジアの人口変動と福祉レジームを概観した。

第1章「東アジアの少子高齢化と福祉レジーム」では、まず、欧米諸国と比較し、東アジアの少子高齢化はどのような特徴を有しているかについて検討した。エスピン・アンデルセンの福祉レジーム論を批判的に検討し、東アジア諸国・地域を第4のカテゴリーとする「後発福祉国家」、「儒教主義福祉国家」、「生産主義福祉資本主義」、「ハイブリッド・レジーム」などを評価した後、日本と中国に特徴的な福祉レジーム論を構築する必要性を論じた。

第2章「日中の福祉レジーム」では、日中両国の社会保障・福祉政策の概要を時系列に整理し、両国の福祉レジームの特徴を検討した。日本の社会保障・福祉政策は、戦後、高度経済成長期、オイルショック後、バブル崩壊後の4つの時期を経て現在に至っている。日本の社会保障制度は、①国民皆保険・皆年金制度、②企業による雇用保障、③子育て・介護における家族責任の重視（特に女性に対する依存度が高い）、④小規模で高齢世代中心の社会支出などの特徴（厚生労働省、2012：35-36）を有している。一方、中国の社会保障・福祉政策は、毛沢東時代・改革開放以降の2つの時期を経て今日に至っている。毛沢東時代において、都市住民にとって国営企業を中心とする「単位」が、農民にとって共同生産・共同分配の「人民公社」が「福祉コミュニティ」である。改革開放後、「単位」と「人民公社」の崩壊に伴って、都市部では、1990年代に労働者を対象に養老保険、医療保険、失業保険、労災保険、出産保険の5種類の保険が制定されたほか、「社区福祉」の整備も進められている。

第Ⅱ部では、日中の少子化と育児支援構造の特徴を検討した。

第3章「日本の少子化と育児構造—札幌市の子育て中の親に対するインタビュー調査を通して—」では、日本の少子化現象と育児支援構造の特徴・問題点を検討した。インタビュー調査の結果より、核家族化、男性の長時間労働・育児休暇の取得の難しさなどにより、家族・親族による自助が常に協力的であるとは限らず、育児負担が母親に集中しがちであること、市町村やNPOによる地域の子育て支援サロンが、子育て中の親子に遊び、出会い、交流する場を提供しており、母親の育児支援の一助となっていることを確認した。

第4章「中国の『一人っ子化』と育児構造—北京市の子育て中の親に対するインタビュー調査を通して—」では、中国都市部の「一人っ子化」現象と育児支援構造を検討した。インタビュー調査の結果から、中国では、育児は、家族・親族間での相互援助、託児施設の充実、中高所得層でのベビーシッター・家政婦の利用などによって支えられており、まだ政策的課題として浮かび上がっていないことがわかった。

第Ⅲ部では、日本の高齢者扶養・介護をめぐる福祉資源の供給構造を検討した。

第5章「日本の高齢者を支える福祉資源」では、日本における家族の変容と老親扶養の変化を

概観した。

第6章「小規模多機能施設による高齢者への共助的支援—札幌市・富山市のNPO法人の事例調査より—」では、「介護系NPO」によって運営されている地域密着型の小規模多機能施設に着目し、その特徴と役割を検討した。2つのNPO法人の事例を分析し、小規模多機能施設における高齢者ケアには、(1) 家庭的な雰囲気とゆとりある生活リズム、(2) 職員と利用者間、利用者同士の「なじみの関係」や「家族」のような関係の形成、(3) 利用者の生活の主体者としての暮らし3つの特徴があることが確認された。そして、こうした小規模多機能施設は、(1) 代表者の高い志と献身的な努力、(2) 小規模ケアに対する職員の理解と意欲、(3) 小規模多機能施設に対する地域の理解と協力、の3つの条件のもとで成立し、運営を継続していることも確認された。

第7章「高齢者介護と子育てをつなぐ地域密着『幼老共生ケア』—東京都小金井市のNPO法人の事例調査を通して—」では、「介護」と「保育」を融合した「幼老共生ケア」を行う小規模施設の特徴と役割を検討した。デイサービスと保育所、地域の交流スペースを同一施設内で運営する小金井市のNPO法人の事例を分析した結果、(1) 家庭的な雰囲気とゆとりある介護 (2) デイサービスを「ノンプログラム」(3) ドアを施錠せず、高齢者の「徘徊」に付き添うなど、利用者本位の介護 (4) 高齢者に敬意を払いながらの介護が明らかになった。

第IV部では、中国の高齢者扶養・介護をめぐる福祉資源の供給構造を検討した。

第8章「中国の高齢者を支える福祉資源」では、家族福祉を補完する「社区福祉」の現状を検討した結果、民間の養老施設に関しては、(1) 一般企業との区分が非常に曖昧であり、基本的に市場メカニズムによって運営 (2) 入居費用が高く、中低所得層の高齢者が入居するのは難しいこと、また、「社区福祉」について、(1) 市場性と福祉性の矛盾 (2) 「社区」は自力で財源を確保 (3) 住民主体で進められていないという諸特徴を把握した。

第9章「『社区』在住都市高齢者の生活実態と福祉課題—北京市の2つの「社区」における事例調査を通して—」では、事例調査から (1) 経済的扶養の面においては、都市高齢者は比較的手厚い都市部年金を享受しており、子どもに頼って老後生活をするという意識はなく、自立志向が高い (2) しかし、身体的扶養（介護）の面においては介護を子どもに頼りたいと考える一方で、一人っ子家庭の高齢者は養老施設や家政婦といった市場セクターに支援を求める (3) 「社区養老」はまだ養老方式の1つとして定着していない、ことがわかった。

第10章「農村失地高齢者の生活実態と福祉課題—北京市郊外の3つの村における事例調査を通して—」では、3村における高齢者の事例を分析した結果、(1) 中高年の失地農民は再就職の問題に直面している (2) 政府の土地収用補償は「社会保険補償」へと転換しつつあるが、3村の失地高齢者の多くは、少額の土地収用補償金・村の年金しか受けていない (3) 社区福祉といえるようなサービスはほとんど存在しない (4) こうした社会保障・福祉の不備を補っているのは高齢者本人とその家族による自助努力である、ことがわかった。